

## 春のいそぎ

吉田 真人

寒さには強い方だと自負していた。なんせ上州の空つ風のなかで、隙間風が自由に出入りする典型的な日本家屋で育った。暖房は炬燵と火鉢（燃料は練炭と木炭）で、灯油ストーブが家に来たのは小学生低学年くらいであったか。小中学校では石炭ストーブがあったような記憶がある。

今までに経験した一番の寒さは、40年ほど前の1月に行ったカナダ・アルバータ州カルガリーである。移動日の午前中、観光しようとカルガリータワーに行った。ホテルからたった50メートル足らずの距離にもかかわらず、まるで八甲田山死の行軍もかくやという難儀であった。30℃（当然マイナス）は優に越えていたろう。やつとの思いでたどり着いたと思ったら、休館で、元の道を這々の体で引き返した。何とか帰り着くことが出来たので、寒さに強かったといえる？

このところ、急激に寒さに弱くなった。特に今年は寒さが身に伝えるようになったと感じる。単なる加齢のせいなのだろう。地球温暖化は何処に行ってしまったのか。冬よ早く去れ！と何時も思っているので、春の訪れを感じさせる事に会つと嬉しいものだ。我が長屋の中庭に梅の木が一本ある。早咲きで鏡開きの頃から花をつけ、立春の頃には満開となる。とても良い香りがする、貴重な春の香りだ。

また、徒歩10数分の所にある大倉山公園には46種220本の梅林があり、こちらは2月中旬から3月初旬が見頃となる。2月下旬には毎年「観梅会」が催され、箏曲・尺八が奏でられるなど風雅も楽しめるが、一方おでん屋などの出店も多く出るので、梅の香りは楽しめない。この観梅会の前後が訪れる好機である。

梅を詠んだ詩歌は数々あるが、昔なじんだ歌が懐かしい。

たが宿の春のいそぎかすみ賣の重荷に添へし

梅の一枝

伴林光平

これは伊東静雄の第三詩集「春のいそぎ」のエピソードとして書かれたものの孫引きである。炭売りが荷を背負って売りに来る時代は経験していないが、春を待つ心は昔も今も変わらない。

（2023年2月24日）